

注意の持続やコントロールがむずかしい 子どもの支援の考え方 —子どもへの働きかけ方や周囲ができること—

筑波大学 人間系(障害科学域)
岡崎慎治

注意とは何か？

- "Everyone knows what attention is. It is the taking possession by the mind in clear and vivid form, of one out of what seem several simultaneously possible objects" (William James, Principles of Psychology, 1890)
 - 子どもに対する教師や親の言葉かけ
 - 「よく見てごらん」
 - 「集中してやりなさい」
 - 「よそ見をしてはいけません」
 - 「気をつけなさい」
- 注意の向け方や続け方、使い方を意識することを求めている
→目に見える手がかり(予定表、写真、絵カード)を示すことも同様

子どもの注意の障害



- ・ 注意の持続性の問題
- ・ 注意の選択性の問題
- ・ 覚醒のコントロールの問題
- ・ 全般的な発達の遅れ(知的発達症)
- ・ 注意欠陥／多動性障害・注意欠如多動症(ADHD)のある子ども
- ・ 自閉症スペクトラム障害・自閉スペクトラム症(ASD)のある子ども
- ・ 高次脳機能障害のある子ども
- ・ 家庭環境の要因(Ex.被虐待)など

注意・集中(不注意)

- ・ 注意集中の苦手な子どもは見落としや聞き落としが多かつたり、注目すべきことに集中できずにあわてて行動したり、他のことに気が取られてしまったり、自分の考えで衝動的に行動したりする
- ・ 注目すべきことに集中できないと必要な情報が得られない
- ・ 何を見るのか、どこを見るのかといったことが事前にわかっているとそこに注意を向けることができる
- ・ どのような援助が考えられるか？

プロセスとしての(選択的)注意とその困難

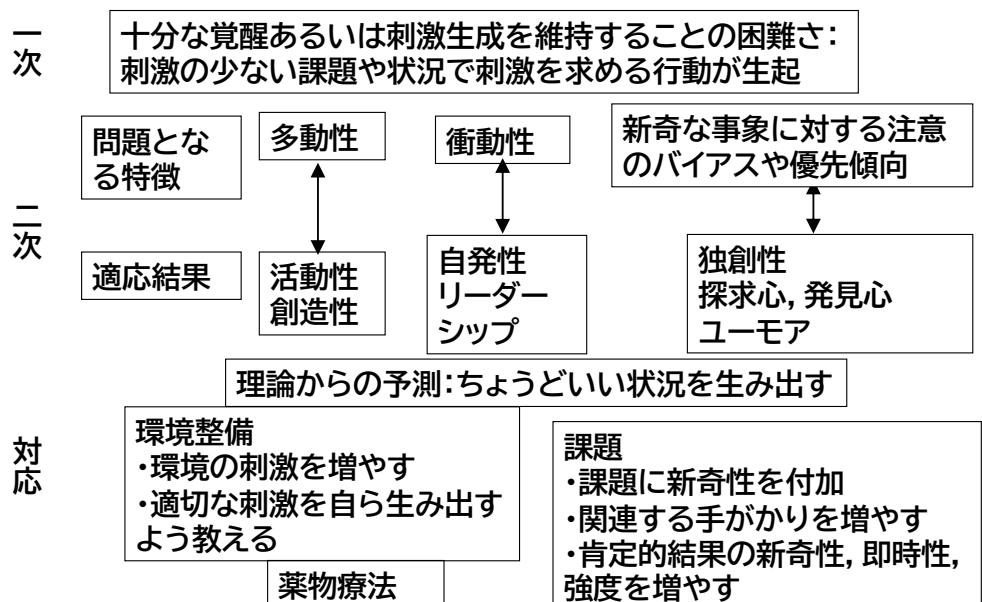
注意のプロセス

- 焦点化
 - 対象に注意を向けるとともに他の情報には注意を向かないようにする
- 解放
 - 注意を向いている対象からいちど注意を切り離す
- 移動
 - 次の対象に注意を移す

それぞれの困難

- 焦点化
 - 始められない, 始めるまでに時間がかかる
 - 始めても続かない
- 解放
 - 重要な点をとり出せない
 - 今するべきことに気づけない
- 移動
 - 複数のことに対応できない
 - 流れについていけない

ADHDの特性とその中の弱さ(問題となる特徴)と強さ(適応結果)
(Zentall, 2005)



支援の基本的な考え方

- 本人の特性そのものを「治す」「軽くする」ことが目的ではない
- 本人の特性として存在はしていても、それが本人にも周りにも「困る」ものではない形で存在するよう
 - その結果として「困る」状況が減る、軽くなる(なったように見える)ように
 - そのためのスキルを身に付けさせるために特性を活用する

かかわる側として大切なこと

- 対処する前に「待つ」(⇒ルールの確認、自発性)
- できた、できないという結果ではなく、そこに至る過程(プロセス)を重視する
- (関わる側のルールとして)原則に基づいた対応を一貫して行えるような援助を考える
- テクニックで目先の問題をしのぐのではなく、その人自身が自分に向き合える機会を積み上げていけるか

関わる際に考慮すべきこと

- ・言葉掛けは短く、やるべきことを具体的に伝える
- ・注意はその場で。蒸し返しはNG。
- ・一貫した態度で接する 「だめ」なことは「だめ」
- ・感情的にならない(よくも悪くも)
- ・表面的な言葉に惑わされないで(よくも悪くも)
- ・本人のプライドを大切に
- ・集団でのほめ方、注意のしかたを十分配慮:自分も「見られている」
- ・成功体験を大切に 可能な範囲で「できるまでつきあう」

できたと思える(自尊感情)ように

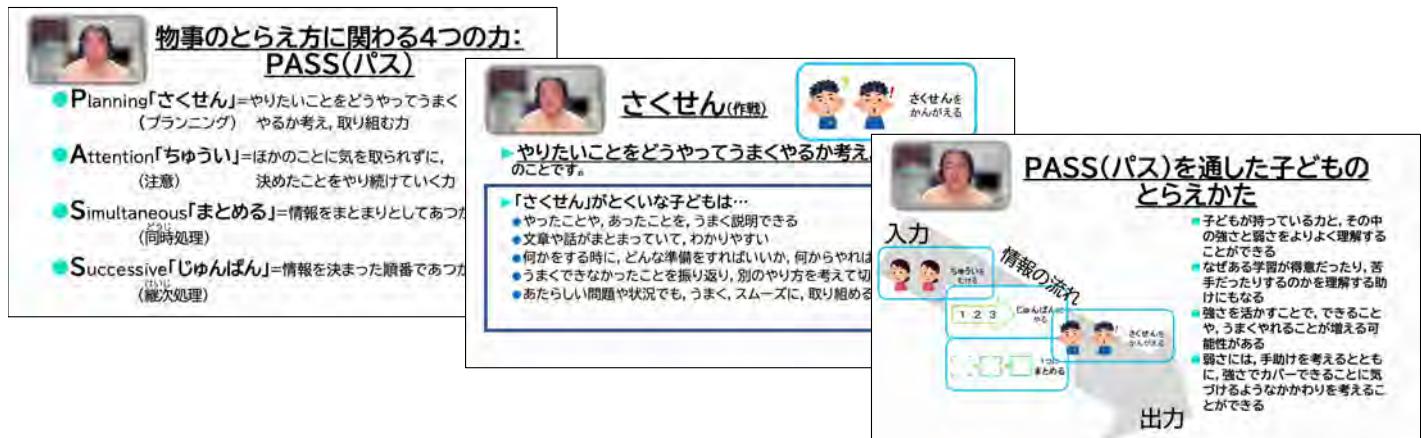
- ・ほめる、認めることを大切に
…できたことより努力する姿勢をほめる
- ・達成感を持てるように
 - 簡単なこと、小さなことから(優先順位をつける)
 - 目に見える形でほめる
- ・困ったときに「助けて」と言えるように
…「わからない」「教えて」等が言える関係、状況を
- ・どんな聞き方・頼み方をすればよいかを身に付けるきっかけや機会を

観察から予測される認知特性の例

	観察される事項	主な認知特性
聞く	聞き違いが多い 状況に合わせた理解ができない	注意集中・聴覚的認知・言語理解 言語理解・状況理解・論理的思考
話す	単語の羅列・短文でしか話せない 会話が続かない	言語表現・文の構成(文法) 言語理解・言語表現・状況理解
読む	読み違いが多い 行をとばしたり繰り返して読む	聴覚的認知・視覚的認知・言語理解 注意集中・目の走査・言語理解
書く	文字の形や大きさが整わない 作文が苦手	視覚的認知・目と手の協応・形の構成 言語表現・文の構成・文字の想起・論理的思考
算数	計算が暗算ではできない 図形問題が苦手	聴覚的認知・数概念理解・聴覚的短期記憶 視覚的認知・空間処理・論理的思考
生活・技能	持ち物の整理整頓が苦手 ルールに従えない	注意集中・視覚的認知・視覚的短期記憶・分類 状況理解・言語理解・記憶・感情のコントロール・社会性

知能のパス理論(パスモデル)

- 発達障害児者の認知特性の評価と支援の枠組みの一つ
- さくせん・ちゅうい・まとめる・じゅんばんの4つの力



認知処理様式を活かす指導方略

藤田(2000)

- ・通常は同時処理・継次処理はバランスよく発達
- ・発達障害のある子どもの多くは認知処理のアンバランスの結果としていずれかの処理様式に強さ・弱さがある
- ・その子どもの弱い処理様式を使うことが前提となる指導方略を用いた結果…
 - 学習効果が上がらない
 - 苦手意識が先行し学習意欲の低下や喪失
 - 意欲の喪失に起因する不適応状態(二次障害)

認知処理様式を活かす指導方略

- ・指導支援にあたっては学習課題の難易度のみを考慮するのではなく、個々の子どもの得意な認知処理様式を考慮した方略を教員側が用いる必要(長所活用型指導方略)
- ・指導すべき内容を重視し、その方法を柔軟に考える
- ・最低2種類の指導方略を使い分ける
 - 漢字書字指導の例
 - ・筆順を重視した指導
 - ・象形文字のような漢字全体のイメージをもたせたり、漢字の偏とつくりの分解・合成、意味と対応づける指導

観察から推測される 得意な認知処理様式

- 同時処理の強さ
 - 空間にに関する活動(地図や図)が得意
 - 全体として物事がどのように進むか理解するのが得意
 - 問題のパターンに気づくこと、うまく扱うことができる
 - 目に見えるものを使うことを好むなど
- 繼次処理の強さ
 - 段階的な指示にうまく従える
 - 順番を覚えるのが得意
 - ことばによる指示を好む
 - 順番に提示された指示にきちんと従えるなど

「プランニング」と「注意」

- プランニング
 - 学習のやり方(方略)を生み出すことの困難
 - 間違いに気づき、修正することができない
 - 状況に応じてやり方を変えていくことができない
- 注意
 - 必要なことに注意を向ける時間が短い
 - 必要のないことに反応してしまう
 - 持っている知識を想起するのが遅い
(Kirby & Williams, 1991より)
- 知能のPASS(プランニング、注意、同時処理と継次処理)の中の概念
- 学習や生活をスムースに行うことに関連
→発達障害圏の子どもの学習上、行動上の困難に関連

プランニングを育てる

- ・子どもの課題や活動の前に:
 - しなければならないことは何かを明確にする(言語化, 文章化)
 - しなければならないことを行うためのやり方や方法を探す(予定表や問題数, 時間といった情報の提示)
 - わかったことが何かをチェックする・必要な情報を集める
 - 課題の量や時間を割り当てる
 - 決めたことを再度確認する
- ・これらの内容そのものを指示するのではなく、子ども自身が気づくことができる、ことばにできるように促す

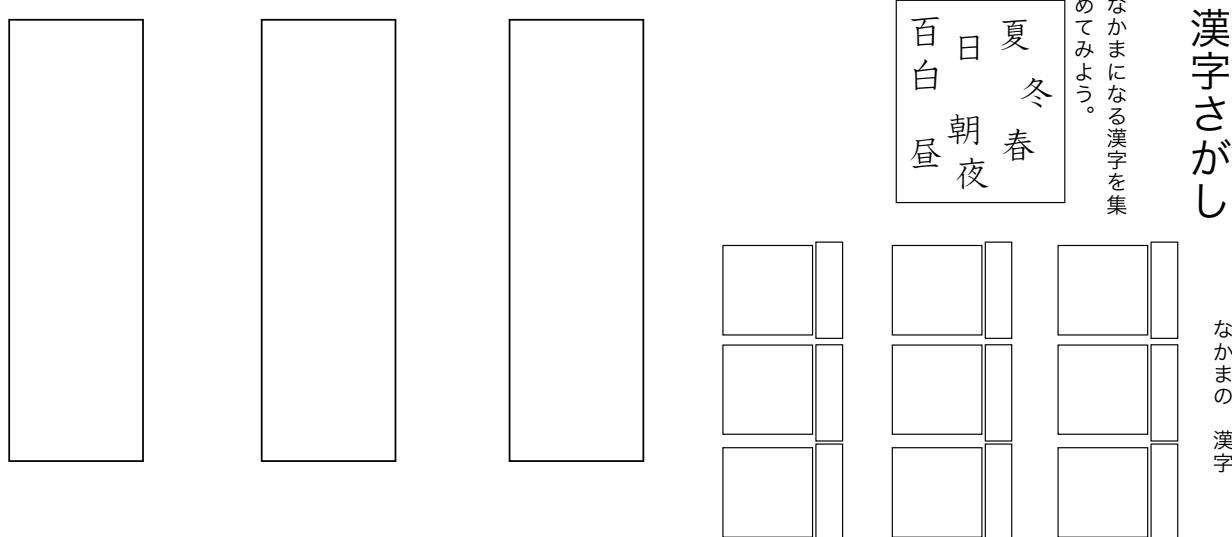
プランニングを意図した指導例

以下にある英単語を1週間の間で覚えてもらいます。

cat	home	dinner
cap	write	mother
man	computer	woman
hat	father	name

- ・どのようにして単語を覚えるかを子ども同士で話し合わせる、発表させる
- ・覚える方法を一覧にして子どもたちに見せる
- ・定期的に覚え方を確認する機会を作る(一つの覚え方を続ける必要はないことも伝える)

プランニングを意図した指導例2



まとめ

- ・「配慮」は大人が子どもをコントロールしやすくするためではなく、子ども自身が「こうすればできる」「こうすればうまくいく」と、「注意を向ける」「気づく」ことができるためのもの
- ・注意(やプランニング)に関する特性は、常に得意だったり不得意だったりするわけではなく、相手や状況、気分によっても変化する。その程度もさまざま。
- ・子どもの特性は(困難に関わるものも含め)表面的な子どもの姿からだけでは理解しづらい場合が多い。
- ・関わりの中では、できた、できないという結果(だけ)ではなく、そこに至る過程(プロセス)に注目する